私の挑戦

岡田幸彦　理工学群／社会工学類
システム情報工学研究科社会システムマネジメント専攻講師
（おかだ ゆきひこ／会計学）

はじめに

筑波大学では、企業会計関係の授業は理工学群（第三学群）社会工学類で開講されています。そして私は、2006年度より、社会工学類の経営工学専門基礎科目である『会計学概論』（2学期金曜1、2時限）を担当しています。

本稿では、私が担当する『会計学概論』の昨年度の概要と課題、そしてそれらをふまえて今年度に行おうと考えている1つの挑戦について、徒然なるままに記します。良い悪いの判断はともかく、私の『会計学概論』に対する思いと、改善の試みをお見知りおきください。

2006年度『会計学概論』の概要

この授業で取り上げる企業会計は、ビジネスマンが持つべき基礎知識として、昨今のビジネス・フィールドでますます関心が高まっています。そのため、この授業は社会工学類の学生だけでなく、他学群・他学類の学生も広く受講するという大きな特徴を持っています。

ここで注意すべきことがあります。私が調べた限り、わが国の商学部・経営学部・経済学部における企業会計関係の一般的なカリキュラムは、会計学総論、簿記論、財務会計論、国際会計論、管理会計論、原価計算論、監査論といった複数科目から構成されています。つまり、商学部・経営学部・経済学部における会計学の総論・概論科目に求められているのは、各専門分野に入る前の導入部として、会計学の全体像を紹介することであるといえます。

一方で、筑波大学では、私が担当する『会計学概論』と非常勤講師担当の『財務会計学』の2科目しか企業会計関係の授業はありません。経営工学という理数系のカリキュラムの中で、文系科目の『会計学概論』に求められている役割は何なのか？他学群・他学類の学生にはどのような配慮をするべきなのか？

会計教育が充実している横浜国立大学と一橋大学で会計学を学び、教職についた

ばかりの私には、これらの疑問に対する適切な解答はすぐに思いつきませんでした。そのため、私は『会計学概論』の講義スケジュールを考えるにあたり、長年にわたってわが国会計分野を牽引してきた一橋大学の会計学総論をベンチ・マーキングしました。

一橋大学の会計学総論は、企業の外部利害関係者への情報開示を主目的とした財務会計分野と、企業内部の経営管理者による情報利用を主目的とした管理会計分野を、同じウェイトで取り上げます。この講義計画を参考に、私は2006年度『会計学概論』の講義計画を以下のように決定しました。

＜授業のねらい＞

会計学の基礎を講義する。

・財務会計は、貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書を理解できるレベルを目指す

・管理会計は、各種原価概念を理解し、差異分析、CVP分析ができるレベルを目指す

＜スケジュール（全10週）＞

1　会計学とは
2　複式簿記の原理
3　財務会計1：貸借対照表
4　管理会計1：原価計算と原価の諸概念
5　財務会計2：損益計算書
6　管理会計2：原価計算制度
7　財務会計3：キャッシュフロー計算書
8　管理会計3：標準原価管理
9　財務会計4：財務諸表分析
10　管理会計4：CVP分析

＜成績評価＞

・小テスト40点、期末試験60点

・小テストは、第3週から第10週までの各週にその週の内容の理解度をテストするもの（全8回×5点）

・期末試験は、企業会計の意義（20点）、財務会計（20点）、管理会計（20点）

2006年度『会計学概論』の課題

2006年度『会計学概論』は、110人ほどの学生が受講し、小テストの回答数で見た授業あたり平均出席率は約8割でした。また、小テストおよび期末試験の結果は、全体として非常によくできていました。これらに関しては、満足ではありませんが、とりあえず納得のいくものでした。

しかしながら、私の授業に関して、以下の2つの大きな課題が浮き彫りになりました。これら2つの課題は、私の能力不足からくるものであり、早急に解決すべきものです。

①授業開始時（1時限）の出席率が低い

私の授業は、私が作成した講義資料をもとに説明をします。そして、その日の内容

の理解度を最後の30分でテストし、小テストと同時並行的に私に自由に質問できる時間をとっています。さらに、小テストには必ず自由記述欄を設け、受講生が質問や要望などを書き、可能な限りフォローアップできるようにしています。そうすることによって、受講生の授業理解度を全体的に向上させようと考えたのです。

しかしながらこの配慮は、意図せざる負のインセンティブを受講生に与えてしまいました。それは、「小テストの時間に間に合えば、出席点はもらえる。小テストの内容がわからなければ、友人に教えてもらうか、岡田に質問すればよい。だから遅刻しても大丈夫だ。」とでもいうものです。そのため、正確なデータは取っていませんが、私の印象では、$y=0.5x+30$（y：出席数、x：授業経過時間［分］、$0<x<120$）といった受講生全体の出席パターンを生み出してしまいました。

筑波大学では、企業会計関係の授業は限られています。しかし、学生が社会人になったとき、会計はビジネスの言語としてあたり前に要求されます。このことを考えると、私が担当する『会計学概論』は、ただ単に単位を取るためだけのものになってはなりません。学生が限られた時間を積極的かつ最大限に利用し、企業会計の基礎知識が体に染みつくような授業を行う必要があるのです。

②簿記教育が不十分

私の授業は、会計情報の利用を重視しています。そのため、企業会計の基礎である複式簿記の記帳手続は、その概要を説明したのみでした。それは、(1) 概論科目である、(2) この授業のメイン・ターゲットである理数系の学生は、経理部門が担当するような会計情報の作成より、彼らが作成した会計情報をいかに適切に解釈し、意思決定に利用するかの方が重要である、という2点を根拠としたものでした。

しかしながら、小テストの自由記述欄や受講生との直接的コミュニケーションから、理数系の学生にも日商簿記検定への大きなニーズがあることがわかりました。また、横浜国立大学と一橋大学を中心とした会計分野の諸先生方から、たとえ理数系の学生がメイン・ターゲットだとしても、もっと簿記教育を重視すべきである旨のアドバイスを数多くいただきました。

一般的に、わが国の商学部・経営学部・経済学部における会計学の概論科目では、複式簿記をあまり大きく取り上げません。それは、別途、日商簿記検定3級レベルを想定した簿記の基礎科目があるからです。しかし、筑波大学は状況が違います。限られた時間の中で、簿記教育を重視したよりよい授業を行う必要があるのです。

1つの挑戦

2006年度『会計学概論』から学んだことは、(1) 受講生が早朝から出席し、積極的に学習する価値のある授業をする、(2) 簿記教育をもっと重視する、という2点でした。これらは、私の努力で解決すべき課題です。これらを解決した持続可能な講義計画を作成し、実行することが2007年度『会計学概論』における私の目標です。

この目標を達成するための第一歩として、まず私は2007年度『会計学概論』の授業コンセプトを明確化しました。そして、このコンセプトのもと、授業の基本計画を再考し、具体的な講義計画と講義資料を作成することにしました。

2007年度『会計学概論』の講義計画は、以下のとおりです。

＜コンセプト＞

「会計もわかる理系ビジネスマンの育成」

＜授業の狙い＞

・基礎的な複式簿記の記帳技術を身につける

・財務諸表分析の基礎を身につける

・利益管理と原価管理の基礎を身につける

＜スケジュール（全10週）＞

1　会計学とは

2　複式簿記の原理、勘定科目と仕訳（演習）

3　補助簿（演習）、転記（演習）

4　残高試算表（演習）、精算表（演習）

5　中間テストと解説

6　Planning and Control for Profit

7　損益計算書と貸借対照表

8　財務諸表分析

9　利益管理

10　原価管理

紙幅の都合上、講義計画の詳細な説明は省略しますが、他大学にはない魅力的な授業ができそうな手ごたえを感じています。

2007年度『会計学概論』も、メイン・ターゲットが理数系の学生であることは変わりません。そのため、授業コンセプトは「会計もわかる理系ビジネスマンの育成」としました。この授業で企業会計の基礎を理解し、『財務会計学』におけるより専門的な財務会計の議論（高度な記帳技術の習得、会計基準の国際比較、企業価値評価のための会計情報の利用など）にうまくバトンをつなげる授業でありたいと思います。

一方で、他学群・他学類の学生への配慮も忘れてはなりません。『会計学概論』は、さまざまな分野の学生が集い、日商簿記検定3級レベルの記帳技術を習得し、かつ企業会計の全体像を理解できる授業でありたいと考えています。